

「あめつちの歌・たみにの歌」小考

稲川 順一

「あめつちの歌」「たみにの歌」の歌意に関しては、現在のところ、よく意味がとれない、一つのまとまった歌としては破綻しているという見方で落ち着いている感がある。本稿では、それを今一度見直して、歌としてそれぞれまとまった解釈ができることを提示してみたい。

「あめつちの歌」「たみにの歌」がそれぞれどのようなものか、次に簡単に紹介しておこう。日本文学・日本語学を大学でとつたことがある者以外には、ともにあまりなじみのないものであるが、「いろは歌」はほとんどの方が知識をもつておいでであろう。これは戦後五十音図が、日本語の音節を網羅したものととして一般化する前までは、広く庶民にまで手習いの時に用いられていたものである。「あめつちの歌」「たみにの歌」はそのいろは以前に同じように日本語の音節を網羅したものである。特に「あめつちの歌」は平安前期には手習いの時に必ず用いられたものである。『宇津保物語』国譲りにもそのことが出ている。「たみにの歌」はそれに較べ広く行われた形跡は見えず、天禄元年に源為憲が著した『口遊』くちずさまという本に見えるだけである。

「あめつちの歌」は次のごとくである。下段に従来の解釈を添える。

あめつちほしそら	天地	星空
やまかはみねたに	山川	峰谷
くもきりむろこけ	雲霧	室苔
ひといぬうへすゑ	人犬	上末
ゆわさるおふせよ	硫黄	猿生ふ
えの江をなれぬて	榎の枝を	馴れ居て

全部で四十八字

「え」が「え」と「江」の二回出てくるのは、それぞれア行の「エ」とヤ行の「エ」を表している。当時はまだその区別があつたのである。そのため、五十音図や次の「たみにの歌」より一字多いのである。

最初は二音節ずつの言葉を並べて、まとまりを持っているが、途中からそれが崩れるために、歌としては破綻しているという考えが概ねである。もともと、別の解釈では「えの江をなれぬて」をそれぞれ独立した二音節語とする解釈もあるが、今はとらない。

この歌の五行目半ばの「ゆわ さる」までの意味は従来のとおり解釈で問題ないと思われる。中国の千字文の影響を受けているとの考えが主流である。

解釈ができないとされているのは「おふせよえの江をなれぬて」の部分である。今までの解釈では次のようになっている。

「生ふ為よ 榎の枝を馴れ居て」

として「生ふ為よ」を二つの動詞「生ふ」「為よ」と二つの動詞に分ける。

これを次のように解釈する。

「負ふせよ 榎の枝を馴れいて」

冒頭の「あめつち」から「ゆわさる」までを森羅万象に對する呼びかけと考え、そのあとの「おふせよ」を「負ふせよ」つまり、相手に引き受けさせよ、と考える。これだけでは、何を引き受けさせるのか、唐突な感じがするであろうが、その次の「えの江をなれぬて」を「榎木の枝をしなるようにして（それを振れ）」と解釈する。榎を神木とする神社もあり、榎自体にそのような靈力が宿っているという信仰もあったのだろうか。

まずは森羅万象（あめつちくゆわさる）に呼びかけて、しなる榎の枝を振りながら、我が身にかかっている災いをそのもたらした相手に引き受けさせるように願う、という祝詞としての意味を持っている、と解釈する。

「たぬにの歌」の全文は次の通りである。

大為爾伊天

たぬにいて

奈從武和礼遠曾

なつむわれをそ

支美女須土

きみめすと

安佐利於比由久

あさりおひゆく

也末之呂乃

やましるの

宇知恵倍留古良

うちゑへるこら

毛波保世与

もほほせよ

衣不弥加計奴

えふねかけぬ

全部で四十七字

最後の行、「えふねかけぬ」の最後に「えふねかけぬ江」と一字補って、全部で四十八字である、とする研究者もいるが、今回はそれをとらない。

「たぬにいて なつむわれをそ きみめすと」までは、恋歌らしく解釈も素直にできる。

田んぼで若菜を摘んでいる私を見て大君が宮廷にいらっしやいとおっしゃる。

次の「あさりおひゆく」の箇所は従来の解釈では「求食りおいゆく」となっている。「あさり」を「求食」とすれば、意味は「食べ物求める」となり、それまでの恋歌のありさまとまるで違う展開になり、全体としての意味が通じな

そのもたらした相手に引き受けさせるように願う、という祝詞としての意味を持っている、と解釈する。

意味は「食べ物を求める」となり、それまでの恋歌のありさまとまるで違う展開になり、全体としての意味が通じな

くなる。そこで「あさり」を「浅いところ」と解釈すれば、「あさりおひゆく」は「大君が川の浅瀬を舟で追っておいでになる」という意味にとることができる。

「やましろのうちゑへるこら」は「山城の野で酒を飲んで遊んでいる若者たちよ」と、大君（がその従者を通して）の若者に対する呼びかけとする。

「もはほせよ えふねかけぬ」は「川の藻葉をさらえよ。舟を繋ぐことができないから」という意味である。

よって、「やましろの うちゑへるこら もはほせよ えふねかけぬ」は大君が舟を泊めるために、そこに見える若者たちに舟を着けられるようにせよ、と伝えている、もしくはこの歌の作者が若者たちに対してそう思っている、と解釈する。

よって全文をまとめて解釈すると次のようになる。

田に出でて若菜を摘んでいる私を、大君がご覧になって宮廷へいらっしやいとお誘いになる。舟の上の大君は川の浅瀬伝いに、逃げる私を追っていらっしやる。そこで酒を飲んで遊んでいる若者たちよ、川岸をきれいにせよ、舟が着けられないから。

以上から、この「たぬにの歌」は、一つの解釈として、恋の歌である、ということが言えよう。

だろうと思う。活字の古めかしい年代物のタイプライターは、私が手紙を書けなくなるからと、売ろうとはしなかった。

一度、姪だという若い女性がイスラエルから遊びに来た。子どものころはかわいくてお尻にまでキスをしたものだと言う。子どもの頃はブラジルにいたのだろうか、それとも、ドナがイスラエルにいたことがあるのか。

ドナのうつった養老院はユダヤ人のためのケア・ハウスだった。帰国前にたずねたことがある。緑につつまれた清潔で瀟洒な建物。こじんまりとした部屋には馬のたてがみがつめてあるというベッドがあった。腰にいいそうだ。そのベッドにすわり、ひざを気にする。足を床につくとひざが痛いので、このベッドの高さがいいと言う。

ケア・ハウスをおいとまするとき、ドナは玄関口まで送ってくれた。そして、両ほほにキスをして、「アテ・ローゴ（では、また）」と言ってくれた。

1992年、またドナを訪ねた。受付で部屋を聞き、廊下をすすんでいると、やってきた看護師が「私はお前を知っている!!」と言う。何やら写真で見たようなことを言う。案内された部屋は彼女の部屋ではなく、病室だった。白い鉄枠のベッドの枕元にはフレームに入った写真が一枚。結婚衣装をまとった家内と笑っている。ドナは私を見ると、「ヨーッ」と言い、そして、「Dodói」。診察中の医師は、股関節を痛め、ボルトをいれてあると説明する。Dodóiは、dor「痛い」の幼児語だ。

肉親も親せきもブラジルにはいないと言っていたが、サン・パウロには弟がいたようだ。

毎年クリスマスにはカードが届いた。そのカードはいつから途絶えていたろう。

養老院からの帰り、私はバスの一番奥の座席にすわり、エディットを思って泣いた。

まらなかったのを覚えている。その時、団体旅行の出発にしたいが間に合わない夢、大きな旅館で自分の部屋に行きつけない夢を見る理由がわかった。同窓会以来、ほとんど見なくなった。あれは17になったばかりだったのだ。私はまだ子どもだったのだ。

入院していた病院は父の会社の近くで、家からはバス停までも遠かった。何年かたってから姉から聞いたのだが、そのバスの中、母は最後部のすみの席にすわり毎日泣いて帰ったという。

リオで最初のアパートはロータリークラブの紹介だった。リオではアパートの一部屋を間借りで人に貸すというのはごく多く、私もコパカバーナに居をさだめた。でも、大家とそりが合わず、知り合った日本人のところにころがりこんで、その日本人の知り合いが出た部屋に移り住んだ。そのアパートの持ち主がドナ・エディットだった。

ドナ・エディットは、ハンガリーの大きな農園に生まれ、歌姫だったという。ときどき屋下がりにはピアノを弾きながらアリアを歌っていた。なくなったご主人は実業家で、水力発電の会社を営んでいたそう。リオの大通りの名にもなっているヴァルガスというブラジルの父とも言える大統領とならんで映っている写真が飾ってあった。

かつては屋敷もあったし、アパートもいくつも持っていた。少しずつ売って、今は私に一部屋貸しているアパートがあるだけ。居間にはアップライトのピアノと豪華なシャンデリア。不思議なシャンデリアで、真夜中でも何かしらの光を壁に反射する。中国風の骨董のバー・ボックスも重厚だった。

すべてを売り払って養老院にはいるから、「ヨーッ、出て行ってくれ」と言われたのは1年もたたないころだった。ブラジル人にもハンガリー人にもアメリカ人にも「リョウジ」という発音はむずかしいらしく、みんな私を「ヨーッ」と呼ぶ。

街に用事をたのまれ、行って戻るとワニ革のでっかい女性用のバッグをくれた。これも売るんだとでっかいダイヤやルビーの指輪を見せてくれたこともある。私が出て、ドナが順番をまだ待っているころ、たずねたことがある。シャンデリアを私の弁護士が500クルゼイロで持って行ったと言う。5000円だ。

用事があったから頼んだのではなく、バッグをやりたいから用事を作ったのだろうし、ダイヤもルビーも高く売りたいからではなく、買える値段で分けたかったの

な押し黙った。

映画を見ようと思ったが、ブラジルで作られたものがない。専門書もうすっぺらなペーパーバックになっていた。映画を撮る力も、本を印刷する力もないのだ。

インフレがひどいので先がわからない、計画を立てることができず、何もできない。本を買うか、髪を染めるか、お金がないからどっちかにしなくちゃならず、本を買った。髪には白髪がまざっていた。今もその薄っぺらな言語学の専門書が棚にのっている。

1980年、留学から帰国するときには、日本人の友人にまざってエレガントなお姉さんが見送りにきてくれた。出張からの帰りには、ネルマー一人が空港まで来てくれた。

そのお姉さんかもう一人のお姉さんかはわからない。手紙には、ネルマがなくなったと書いてあった。何通もの手紙がゆきかった。何十年かの友情は素晴らしいとも。リュウマチの薬が強かったそうだ。

リオには日本人学校があり、サトウのおばあちゃんはそこの音楽の先生の身の回りの世話をしていた。ポルトガル語で言うならエンプレガーダだ。日系移民の一世で、御主人と二人で九州からやってきたという。留学中はずいぶんお世話になった。毎晩のようにその先生のところで夕飯をごちそうになっていた。つまりは、サトウのおばあちゃんが作ってくれていた。

社会に出て、熊本に赴任し、結婚もしましたと、会いに行った。コパカバーナのアパートに息子夫婦と住んでいた。先生と二人で贈った金縁眼鏡をかけていてくれた。陽射しのまぶしい通りにでると、ハンバーガーをご馳走してくれ、露店でピンクの輝石のネックレスを買ってくれた。今でも、頼まれて助産に行くという。ご主人なきあとは、エンプレガーダと産婆で生計を立て、子どもたちを育て上げたのだ。

父をなくしたのは高校3年になって間もなくの6月だった。体調が悪いと通院し、良くならないと病院をかえたら、すぐに入院、あっという間だった。

数年前の同窓会、高校のときの修学旅行の話が出た。修学旅行は高校3年の5月だった。宮崎のホテルのビリヤードで、慣れない球にねらいをつけた目がさだ

ていたとおり、リオは夢のように美しい街だ。輝く大西洋、白い砂浜、海岸沿いに幹線道路が走り、シャレた高層アパートが軒をつらねる。

リオでは連邦大学の文学部に在籍し、言語学や音声学の授業を聞いていた。知人の紹介で知り合った、日本語を学んでいる他大学の学生がジェファソンだ。学部の卒業式に出席し、段にあがったところを写真にとった。私が帰国してしばらくすると、日本政府の奨学生となって東大にやってきた。専門は農業政策だったと思う。博士まですすみ、帰国、当時はサン・パウロの東京銀行に勤めていた。

同じころ知り合ったのがネルマだ。ネルマもジェファソンも日伯文化協会で日本語を勉強していたように思う。ネルマはリオの連邦大学、文学部を卒業し、ポルトガル語、つまり、国語の先生をしていた。驚くほど美人の三人姉妹+弟だった。

二人とはよく会った。三人で日本語の授業をしたり、ネルマと芝居を見に行ったり、ジェファソンと美術館に行ったり。よく話した。あの頃は、夢もポルトガル語で見ていたが、それでもブラジル人の言うことが100%分かっていたわけじゃない。でも、二人の話すことはすべてわかったし、言いたいことは何の苦もなくすべて伝えることができた。

ジェファソンはサン・パウロに引っ越していたが、ネルマはかわらずリオにいた。ネルマとはパオン・ジ・アスーカにのぼった。リオの観光写真には必ずと言っていいほどあらわれる小さな岩山だ。ロープウェイで頂上までのぼる。ジェファソンとは日本で会っていたが、ネルマとは丸々12年ぶりだった。

相変わらずだった。私は коммуニストだと言っていた。日本には必要ないが、この国には今、 коммуニズムが必要だ。当時、ブラジルの大統領はフェルナンド・コロールといい、不評をかっていた。若くて顔がいいから当選しただけだというもっぱらの評判で、経済は乱れ、未曾有のインフレだった。Tシャツを買おうとしたら正札に値段がない。札にある番号を値段表にてらし、その日の価格を知る仕組みになっていた。あまりのインフレに札に価格を書き込めないのだ。治安も悪化していた。途中よったニューヨークでは、グリニッジビレッジを夜、家族連れが散歩していた。なのに、リオではアパートの建物に鉄作が張り巡らされ、電動の門扉がついていた。大統領が国を食い潰したのだ。

リオの人たちは疲れていた。幹線道路をバスで走っているとき、後ろのバスに強盗がでたことがある。こちらのバスの誰かが気づき一瞬ざわついたが、すぐにみんな押し